

公益の風 #4



東北公益文科大学大学院運営委員
准教授 門松 秀樹

来年、酒井家が庄内に入部して四〇〇年を迎えるにあたって、庄内地域では様々な記念事業が推進されている。筆者は日本政治史を主な専攻としているが、庄内日報社との共同研究とその成果報告として、『庄内日報』に二〇回にわたって「酒井家庄内入部四〇〇年 歴史と時代」という連載記事を執筆する機会をいただいた。以下に庄内藩の歴史を振り返ったことで得たいささかの雑感を述べることをお許しいただきたい。

庄内藩主を務めた酒井家は「お殿様」として庄内地域の人々に親しまれ、また、明治以降の歴代の酒井家当主も庄内地域のために尽力されており、まさに「相思相愛」といってもよい良好な関係が続いている。ただし、酒井家の入部当初から「相思相愛」の関係だったわけではない。

初代藩主酒井忠勝入部直後には、新領把握のために



庄内藩の歴史に学ぶ

行った検地とその結果としての実質的な増税などから領民との間に軋轢を生み、領民が藩政の非道を幕府に直訴するなど、その幕開けはとても良好とはいえない関係であった。その後も江戸時代の大名の常として、しだいに逼迫する財政を年貢の増徴で解決しようとする藩政が続き、庄内藩の藩主と領民の関係は、微妙な緊張と対立を孕んだ、江戸時代における一般的な領主と領民の関係の域を出ることはなかったといえる。

ところが、天保一二年（一八四〇）に庄内・川越・長岡の間で持ち上がった三方領地替えの騒動では、藩主・藩士といった武士だけでなく、農民や商人、町人などの領民も一体となって酒井家の転封阻止のために動いた。悪い殿様を替えてほしいという領民の訴えはそれほど珍しくはないが、敬愛する殿様を他に移さないでほしいという訴えは滅多にない。こうした領民の訴えが評判を呼び、老中水野忠邦が強行しようとした領地替えを将軍徳川家慶の直裁で中止するという前代未聞の結末をもたらした。酒井家は領民に慕われる「お殿様」となっていたのである。

筆者は、なぜ酒井家が領民からこれほどまでに慕われるようになったのかに興味があった。戦国時代以前から庄内の領主として根付いているというのであればともかく、本貫を三河に持

つ譜代大名であって、幕命で転封され、初期藩政においては領民との対立さえ垣間見えたほどののに、いったい何があったのか。

鍵は、酒井家中興の名君との評も高い第七代藩主忠徳の藩政改革にあったようだ。領内屈指の豪商である本間光丘や家老の白井矢太夫らを抜擢し、二〇万兩ともいわれた莫大な借金を返済し、凶作・飢饉に備えた備荒貯蓄を行い、藩校「致道館」を整備して士風の刷新や人材の育成を図る一連の改革が進められた。その結果、農村の復興や財政の再建などに成功した庄内藩は、江戸時代後半に東北地方を襲った「天明の飢饉」・「天保の飢饉」において、領民から餓死者を出さなかったといわれるほどの対応が可能となったのである。

飢饉という未曾有の災害に当たって自分たちの生命と生活を守ってくれた「お殿様」に対する領民の信頼が高まるのは当然であろう。藩としてもその経営上、領民の生活を安定させてその信頼を得た上で領内の経済を活性化することが藩政において重要であると理解すれば、領民の保護に努めるようになる。こうして庄内藩では藩主と領民の間に信頼関係が醸成され、それがやがて強固なものへと発展して「相思相愛」の関係となったのだと思う。

庄内藩における酒井家と領民の関係は、政治不信の問題を考える上で手掛かり

の一つとなるのではない。いささか牽強附会に聞こえるかもしれないが、本質的には、為政者が被治者のニーズに心える形で政策の決定・推進が行われるのかというところが、政治に対する信頼を得るための要諦であることを庄内藩の事例は示しているといえる。無論、「由らしむべし、知らしむべからず」が当然だった江戸時代と現代は異なるので、政策の趣旨や目的を十分に説明し、国民にそれが浸透しなければ、どれだけ国民や公共のためということを謳おうとも、国民は政策に納得せず、政治への信頼にはつながらないだろうが…。

実は、歴史学とは、過去の出来事を調べるだけの学問ではない。現代社会が直面する問題を解決するためにはどのような方法を探るべきか、過去の出来事を博捜し、分析し、考察する事例研究でもあるといえる。

「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」とは、鉄血宰相として知られるオットー・フォン・ビスマルクの言葉であるが、この言葉が事例研究としての歴史学の側面を端的に表しているように思う。

歴史を学び、歴史に学ぶということとは、大変だが、実に楽しいこともある。大学や大学院において歴史を学び、研究することはどういうことなのか、拙稿を通じてその一端でも読者の皆様にお伝えできたいれば、望外の喜びである。